上り下りとも全て内陸側回りなので、このままでは私のこだわる〝全線隅から隅まで〟がいつまでたっても成就しないからです。大沼駅を過ぎ勾配の急な線路を下って行く頃には夕日も沈み、列車のずっと先に函館の街の灯が広がっていました。

北海道乗り鉄旅の３回目は、翌平成２５年７月上旬となりました。いよいよ北海道ＪＲ線の仕上げの旅です。まだ乗っていない数ヶ所の中短距離路線や一部区間を３日かけて乗りましたが、なかでも札沼（さっしょう）線は思い出の路線となりました。

この線は愛称「学園都市線」の通り沿線にいくつかの大学があり、朝晩は１０～１５分間隔、昼間も２０分間隔で走っていますが、その大部分は途中駅で折返しとなり、終点の新十津川まで行くのは一日３本だけです。札幌を７時に発ち、９時半に新十津川駅に着きました。終点まで乗ってきた数人の客が屋根もないホームに降り立つと、思いもよらず６～７人の保育園児が引率の先生に連れられて、にこにこしながら出迎えてくれました。小さい手に持った白いカードを差し出すので、びっくりしながらもこれを受け取りました。それは絵手紙のカードでした。

山とディーゼルカーと朝顔のイラストが描かれ、

『おかえりなさい』　終着駅のある新十津川へ

またいつか笑顔で会えるその日まで・・・『行ってらっしゃい』

の文言が書かれていました。

駅の隣りにある病院の附属保育所の園児と先生が描いたものだそうです。北海道乗り鉄の旅の思い出の品となりました。

なお、その後のダイヤ改正で、終点の新十津川まで走る列車はさらに本数が減り、一日１本だけとなりました。一日１本だけというのは全国のＪＲ線の中でもここだけのように思います。赤字路線を多く抱えるＪＲ北海道の苦悩を感じます。

また、この３年後の平成２８年３月には、新幹線が青函トンネルをぬけて新函館北斗まで営業を開始しました。その半年後に私も乗ってみましたが、在来線が津軽海峡や函館山を望みながら走るのに比べ、新幹線は海岸線から離れているうえにトンネルが多いため車窓からの風景を楽しむことが殆んどできず、「北海道に来たんだ」という感慨は湧いてきませんでした。

（第二話　終り）

エッセイ

関ケ原の戦い～明治維新～平成最後の夏に想うこと

東谷　由紀

去年の夏、初めて関ケ原古戦場跡を訪ねました。

その日は８月１５日の終戦記念日でしたので、東首塚あたりで正午のサイレンが響きました。いつもは先の大戦で命を落とした方々を思ってする黙祷ですが、この日に限っては４００年以上前のこの地での戦いに想いを馳せながら不思議な気持ちで息子と一緒に立ち止まって黙祷をしたことが深く印象に残っています。折りしもその日は、慶長５年９月１５日の早朝と全く同じように、小雨が止んだばかりで深い霧に包まれていたので、まさしく当時にタイムスリップしたかのような気持ちになりました。

戦国武将たちが自らのプライドと一族の生き残りをかけて死闘を繰り広げた場所に佇むと、あの時代の息吹がよみがえってくるようでした。どちら側に味方するのかという選択でその後の先祖代々までの運命が決まった、まさに天下分け目の戦いが起こった場所、世界三大古戦場の一つである関ケ原古戦場ですが、実際に訪れてみると、山々に囲まれたわずかな平地でした。ここで十数万の大軍が乱戦を繰り広げていたとは想像しがたいほど意外な狭さに驚かされます。

たとえば１８１５年のワーテルローの戦いは、約２キロ平方キロメートルもの広大な丘陵地帯が広がる土地で行われた戦いです。十万単位の軍勢がぶつかり合う戦争というのは、普通ならば広い平野でやり合うものです。そうした意味でも、関ケ原の合戦は世界的に見て極めて特殊かもしれません。

石田三成が陣を置いた笹尾山からは、戦場全体の様子が見て取れます。先に布陣した三成がかなり良い場所に陣取ったことがわかります。

～石田三成陣跡　笹尾山からの眺め。徳川家康の陣のある桃配山も見える～

現在の笹尾山には、どこにどの武将の部隊が陣取ったかわかるような案内板があり、合戦の様子をイメージしやすいです。そして東方に位置する南宮山には、西軍に属した毛利と吉川の１万８千の大軍、松尾山には小早川の１万５千の大軍、天満山には宇喜多の１万７千。もしかしたら当時の石田三成は勝利を確信していたのかもしれません。しかしながら実際の歴史は石田三成の思った通りにはいきませんでした。関ケ原の合戦はわずか６時間足らずで決着がついた戦いでもあります。戦闘開始直前までは、これだけ大規模な戦いならば数年を費やすのではと考えられていたのにもかかわらず。

毛利輝元が総大将を務め、石田三成が現場指揮官に立った西軍では、どうやら長期戦を想定していた形跡があるようです。

家康と内応していた吉川は動かず、南宮山からの支援はなくなってしまいます。

～石田三成陣跡に今も掲げられている大一大万大吉の軍旗～

さらに小早川秀秋の裏切りにより西軍は完全に動揺し、あとは皆様ご存知の通り、徳川の統治が江戸時代末期まで続きます。この関ヶ原の戦いでは、多くの遺恨や恨みが生じています。

この合戦において毛利輝元は西軍の総大将と祀り上げられてしまいました。この戦にあたり、お家の安泰を図るため一族の吉川広家は東軍に通じており、「毛利の領地は安泰」という約束を家康の側近からもらっていました。ところが西軍の敗戦処理において、家康は約束を反故にして、中国八カ国１２０万石に及んだ毛利の領地を周防・長門３０万石に減封してしまったのです。この査定に吉川広家は抗議しましたが家康から直接確約をとっていなかったため、聞き入れてはもらえなかったのでした。

この処置は毛利家に徳川憎しという遺恨を残すこととなり、その恨みは幕末の動乱へと数百年もかけて繋がっていくこととなります。

長州は減封で実収が１０分の１になり、あまりの財政難に当主・毛利輝元は藩の返上を訴えましたが懲罰の意味もあるので却下され、藩財政と立て直すのに相当の苦労をしています。

毛利・吉川もちゃんと戦わなかったのだから自業自得だったのかしれませんが、その気持ちを維持するためにか、藩主と家老が毎年・元旦に倒幕の決意を確認しあう秘密儀式があったほどです。

（毎年正月に「殿、今年は徳川を討たれますか？」と確認していたとのことです。）

薩摩島津氏率いる薩摩藩も、関ケ原では徳川に対し遺恨を残す形となりました。関ケ原の合戦の際に、薩摩の島津義弘はたった１５００人の軍勢で参加しました。（６０万石の所領から考えると１万５千ぐらいの軍勢は動員出来たはず）しかも、当初は東軍に参加しようとしていたのに二条城内の徳川の家臣、鳥居元忠に「助太刀無用」との言葉をうけ、いや応なしに西軍に加わることになったようです。関ケ原での西軍敗北の動きが見えた段階で島津勢は戦場の中央突破を図り（捨て奸）命からがら逃げかえり１５００人の人数が最後は８０人ぐらいになっていた程の惨状でした。しかし島津は領地が減らされるどころか、琉球貿

易の窓口という立場も容認されました。この甘い処分の理由は、島津側の粘り強い交渉術や特殊な南方地域の管理を島津に継続させたかったという徳川幕府の思惑が反映された結果だといわれていますが島津側に根深い徳川への不信感が生まれたのも事実でした。

悲惨なのは土佐の長宗我部です。当初、長宗我部盛親は東軍に参加しようと考えていましたが、近江国水口で西軍の長束正家に阻まれてしまい、説得されて仕方なく西軍に加わってしまいます。関ケ原では参加したものの吉川に邪魔されて動けなかったにもかかわらず結果的にお家は取り潰しになってしまいました。その理由としては家臣の讒言を信じ、長宗我部盛親が兄である津野親忠を殺害したためだと言われています。その後、長宗我部の家臣たちは郷士となり、徳川への恨みを蓄積していくこととなります（その後、盛親は大坂の陣に豊臣方として参加）。

幕府の方では、関ケ原以降も島津・薩摩を警戒し続け、チャンスがあれば潰そうと狙い続けていました。

幕府隠密が多数潜入し殺されていますし、公儀御用も色々いいつけて藩財政をピンチにさせようとしています。特に宝暦の治水工事（濃尾平野の河川工事・尾張藩だが御三家だったので天下普請として薩摩に命令した）では、わざと何回も工事をやり直させたり、スパイにできた堤防を壊させやり直させたりとヒドイ妨害工作をしています。工事はなんとか終了し当時の藩の家老が切腹し全ての財政責任を引き受けた形で決着しています。こうした薩摩に対する幕府のやり方に【関ケ原の恨み】という建前をスローガンのように掲げ、一つの目標に向かわせ、若者を鍛えるためにキャッチフレーズ化していったのではないでしょうか。

こうして毛利（長州藩）、島津（薩摩藩）、長宗我部（土佐藩）たちが恨みを積み重ねながら、結果的には幕末に徳川幕府を倒す倒幕運動へと繋がっていきました。

つまり、幕末に起きた戊辰戦争とは関ケ原のリターンマッチだったのではないでしょうか。

この様子を石田三成があの世から眺めていたならば「だから関ケ原でちゃんと戦っていればよかったのに！俺があれほど言ったじゃないか！」と怒っているかもしれませんね。とにかく結果的には関が原から２６７年後にリベンジすることになるわけです。もし徳川幕府が関が原の敗者をもっと優遇していたら明治維新は違った結末だったのでしょうか。いや、敗者を優遇していたとしたら、徳川の長い平和な時代が保たれることもなく、江戸の文化が花開くこともなかったかもしれません。妄想は膨らみます。

武将のプライドをかけた関ケ原の戦いから２６７年後、これまでのような藩や幕府のためという枠を越え、学識ある方々から純粋な若者たちまでが真剣に日本の未来を憂い、命を懸けて日本の仕組みを変えてくれた明治維新が起きます。この時代の素晴らしい方々がサムライスピリッツを列強諸国に示してくれたおかげで、日本国はアジアの中で唯一植民地にならずにすんだのかもしれません。

そしてその明治維新からさらに１５０年後。

平成最後の年の夏に、中学１年生の息子が横浜歴史研究会の夏のイベント「こども歴史教室」で「関ケ原の戦い」についての発表をする機会をいただきました。歴史好きである本人が、自分より小さい小学生たちにいかに興味を持ってもらえるかを試行錯誤しながらパワーポイントで資料を作成したり、合戦のジオラマをペーパークラフトで作ったりしておりました。自分の好きな石田三成は世間的にも子ども達にもあまり人気がないので、三成の人となりをわかってもらおうと、秀吉と三成の出会い（三献の茶）、大谷吉継と石田三成のお茶会での友情のエピソード、大一大万大吉に込められた想い、三成の最期から見える彼の優しさなど、どうしても入れたい部分は子供向けのクイズ形式にして少しでも興味を持ってもらえるように工夫していました。三成の人柄は、不器用ながらも実直で義理堅い面に惹かれて、直江兼続・大谷吉継・真田信繁・島左近といった多くの優れた武将が彼を心から信頼して同心したことからもうかがい知ることができます。そこを少しでも伝えたい気持ちで資料を作っていました。

１２歳の夏にこのような機会をいただけたことは本当に幸運で貴

重な経験だったと思っております。発表終了後に横浜歴史研究会、常任理事の高尾様に石田三成公の肖像画と辞世の句が手描きされたとても素敵な扇子をプレゼントしていただきました。本人は大変喜んで「これは家宝にしよう」と言っておりました。

～石田三成公の肖像画と辞世の句を添えた高尾様手描きの扇子を持って～

思い出に残るプレゼントをありがとうございました。これからの横浜歴史研究会において、このような機会を少しでも増やしていくことで、次の世代への架け橋へなれるよう、そして皆さまが繋いできた想いを息子共々守ってゆけるようになりたいと思った平成最後の夏となりました。お世話になった皆さま本当にありがとうございました。

【筆者紹介】 平成29年4月入会。横浜市西区在住・宮城県気仙沼市出身。好きな言葉は「和顔愛語　先意承問（わげんあいご　せんいじょうもん）」。（これは『大無量寿経』というお経の中に出てくる言葉で和やかな笑顔と思いやりのある優しい話し方で人に接し、相手の気持ちを先に察して、相手の為に何ができるか自分自身に問いただすという意味だそうです…筆者談）

エッセイ

北海道旅行　ダブル＝台風・地震遭遇記

古谷　多聞

インターネット「JR東日本／大人の休日倶楽部」欄に「大人の休日パス秋の東日本・北海道スペシャル26000円」の掲載を見、9月2日の横浜歴史研究会発表の骨休み、そして女房に日頃の感謝の意を込めて「北海道道南・秘湯巡り」を計画

〈余談〉1、秘湯とは○○温泉と謳ってはいるもののその多くは温泉街の喧騒から懸け離れた静寂な山間の一軒宿の温泉場で、正に穴場の隠し湯＝シャングリラである

2、私は「日本秘湯を守る会」の会員で現在10宿の秘湯を巡り、今回北海道の秘湯ロマンを求め三連泊を計画　因みに女房は「守る会」では私の先輩格で既に20宿以上の秘湯を巡っている古参会員

今回当初計画

第一日目（9月3日）知内温泉

800年前に開湯した北海道最古の湯

戸塚→東京→（東北・北海道新幹線）→木古内→（路線バス・旅館送迎バス→知内温泉

第二日目（9月4日）丸駒温泉

昔は支笏湖温泉から小舟でしか往き来出来なかった温泉場で、湖と同水面にある湖岸波打ち際の天然露天風呂が売り物

知内温泉→（旅館送迎バス）→木古内→（北海道新幹線）→新函館北斗→（函館本線）→南千歳→（路線バス）→支笏湖温泉→（旅館送迎バス）→丸駒温泉

途中長万部駅で前日に予約している駅弁「カニ飯」を同駅プラットホームで受取り、美味に舌鼓を打つのも旅の一興

第三日目（9月5日）銀婚湯　大正天皇銀婚式当日に温泉が湧き出た事から命名

丸駒温泉→（送迎バス）→支笏湖温泉→（路線バス）→南千歳→（函館本線）→落部→（旅館送迎バス）→銀婚湯

第四日目（9月6日）大沼公園散策

銀婚湯→（旅館送迎バス）→落部→（函館本線）→大沼公園駅・大沼公園周辺散策―（函館本線）→新函館北斗→（東北・北海道新幹線）東京→戸塚

9月3日・曇

・今回旅行苦難の初っ端＝ケチの付け初め　前夜例会発表の安堵感もあり例会後の懇親会ではついつい仲間と深酒し当朝は二日酔い状態で戸塚駅を出発　案の定横浜駅を過ぎた辺りから吐気を催し遂に西大井駅で途中下車しトイレに駆け込みホームベンチで休息する体たらく　今回旅行の前途多難の前触か？

・木古内駅から松前行の路線バスに揺られ左手車窓に津軽海峡を眺めながら走ること約40分、更に旅館送迎バスに乗換し約10分で知内温泉に到着　正に山の中の一軒宿